論文

言葉に記憶された舶来品の普及
―「画鋲」「押しピン」「ガバリ」―

Popularization of Imported Goods Remembered in Words:
Gabyo, *Oshi-pin*, and *Gabari*

木村源知　KIMURA Genti [1]

In Japan, regional differences currently exist in the designation of drawing pins. In addition to the official name *gabyo*, *oshi-pin* and *gabari* are frequently used in western Japan and Gifu Prefecture, respectively. The drawing pin was imported to Japan as drawing supplies accompanied by Japanese modernization, such that regional differences in their designation may reflect the process by which modern industrial products from overseas spread throughout the country. Thus, this study examines the causes of these regional differences using the literature and real objects.

The following conclusions are obtained. Firstly, *gabari* is considered to have become popular in Gifu Prefecture after Sakugoro Hirase, who is currently known as a famous scientist but was a drawing teacher in Gifu Prefecture during 1875–1887. He used it in his textbook and educational activities at schools. Secondly, *oshi-pin* is believed to have spread throughout western Japan after an influential imported stationery distributor in Osaka Prefecture used it in the 1900s. And finally, *gabyo* is deemed to have acquired the status of an official name after it was used as an item name for patents circa 1910s and the simultaneous expansion of domestic production of drawing pins.

キーワード：方言、画鋲、近代化、文房具業界、平瀬作五郎
Japanese dialect, Drawing pins, Modernization, Stationery industry, Sakugoro Hirase

1.　背景・目的

我々の日々の生活はモノ[1] を介して営まれており、モノはいわば暮らしの主役である〔例えば、印南他　2002：55〕。こうした人とモノとの繋がりは、日常使う言葉に色濃く反映される。とりわけ新しい生活用具が発明・移入された際に与えられ普及する「新物新語」には、当時の生活や社会の状況が映し出される。方言研究を体系化したことで知られる藤原与一は、新物新語の創出と普及の背景には、急所に迫る命名心理や社会の共鳴などがあり、「一つの語詞が、世の中に出て、ひとりまえになったとすれば、これは、国民の大衆が育てたようなもの」と述べている〔藤原　1955：91〕。

画鋲はヨーロッパで発明された可能性が高く、19 世紀中頃から存在が確認されている〔Ward 2014：16〕。日本には、製図器具の一つとして、幕末～明治初期に輸入された。こうした比較的新しい物品であるにもかかわらず、画鋲は現在、正式名称である「画鋲」のほかに、西日本では「押しピン」、岐阜では「ガバリ」と呼ばれる。「ガバリ」はカタカナまたはひらがなの「がばり」と表現されることが多いが、これは漢字表記に「画針」と「画張り」の説があり、現在は起源が不明瞭とされているためである[2]。

このような画鋲呼称の地域差は、他地域の出身者から指摘されるまで気づかないことが多く、しばしば出身地に関する話題に登場する〔例えば、篠崎・毎日新聞社　2008：24–25〕。方言学では、使用者自身が方言と気づかずに使っている言葉は「気づかない方言（気づかれにくい方言）」と呼ばれ、1980 年代から研究が行われてきた〔例え

（1）kimuragenti@yahoo.co.jp

ば、井上 1983; 沖 1992; 篠崎 1996; 早野 2016〕。特に新物新語の地域差の解明は、方言の地域差が形成されていくプロセスを目の当たりにできる点で意義が指摘されている〔篠崎 1996：146〕。

明治初期には未知の概念や物品が大量に海外から国内に持ち込まれたため、意味をより正しく広く伝えることを目的とした翻訳語の創出が不可欠な作業となった。こうして生成された翻訳語群は「明治翻訳語」と総称される〔福田 2008〕。よって画鋲の事例のような舶来品の呼称定着の問題は、新物新語の中でも特に明治翻訳語の創出と淘汰の歴史と捉えられ、近代日本の始まりの頃の記憶を留めるものとして重要である。

また画鋲についての考察は、より大きな括りでは製図そのものの普及に関する洞察も与える。図画の分野では、器具を用いずに手だけで描く「自在画」（写生やデザイン）に対して、製図器具を用いて物体の形を幾何学的に正確に描くものは「用器画」と呼ばれる。我が国の近代普通教育制度は、1872（明治5）年の学制から始まったが、当初から上等小学と下等中学に用器画を含む図画の科目が存在した〔片岡 2020：2〕。用器画は、数学の分野から見ると、立体的な図形を平面で表現する技法である「図法幾何学（図学）」に含まれ、さらには具体的な機械・建築物・工作物などの図面を製作する「製図」に繋がっている。東京大学の前身である南校（大学南校を明治 4 年に改称）では、お雇い外国人教師の一人を数理・機械・図画の専門家にする構想があり、明治 6 年に改称された開成学校では、当初から図学教育が行われていた〔原 1970：37–39〕。このように明治初期の日本では、科学技術の基礎として用器画・図学教育が重視されていた。また製図による設計の規格化の導入は、近代日本の殖産興業を担った方法論の改革でもあり、その受容過程の一端を明らかにすることは、産業史においても重要な意味を持つ。

幕末～明治初期に海外から移入された近代工業製品の名称の「気づかない方言」を扱った先行研究としては、上村〔2000〕が挙げられる。この研究では、黒板拭きの呼称として現在の鹿児島・宮崎・愛媛等で用いられている「ラーフル」を対象として、その語源と、呼称の地域差が生じた原因を考察した。これによると「ラーフル」は、大阪発の業界用語として、明治初期には大阪・愛知・和歌山あたりから西日本に広く用いられたが、その後「黒板拭き」「黒板消し」に押され、現在では西の周圏地域にのみ色濃く残ったものとされる。また外国人教師など特定の人物の存在が、地域に特異な呼称を普及させる契機となる可能性を指摘している。

このように近代化に伴い移入された舶来品呼称の地域差の研究は、様々な学問分野にまたがった有益な考察を与える。特に画鋲呼称に関する調査は、生活史だけではなく、産業史、学術史、学校史、といった分野に広く寄与すると考えられるが、先行研究は管見の限りない。

産業史や学術史のような細分化された分野では、生活に根差した言語現象の一端しか捉えることができない。また方言学では、方言形成論によって方言の形成メカニズムが主要なテーマとして論じられるが〔小林 2016：19〕、新物新語のように物的資料を必要とする場合は容易ではない。アカデミズム化以前の民俗学では、「民俗語彙」の採集と整理が盛んに行われていたが、現在は方言学と分離し、言語と民俗のかかわりが議論されることはほとんどない〔町 2015：11〕。よって本稿で扱うような広汎なテーマに対しては、生活者・使用者の視点を軸に、あらゆる文献や実物資料から使用状況を採集して分析する、生活学的手法に拠る研究が最適といえる。

以上を踏まえ本研究では、文献と実物資料を用いた分析から、現代日本における画鋲呼称――「画鋲」「押しピン」「ガバリ」――が成立したおおよその時期を明らかにし、これらが地域差を伴って普及したメカニズムに関する洞察を得ることを目的とする。なお後の章で示すように、「ガバリ」の本来の漢字表記は「画針」である。また「押しピン」はもともと「押ピン」と表記されていた。よって本稿では以後断りなくこれらを同一のものと扱う。

2.　画鋲呼称の現況

本章では、後の議論に先立って画鋲呼称の現況を確認しておきたい。現在「画鋲」と「押しピン」の東西対立はよく話題に上る[3)]。しかし最近のインターネットのアンケートに基づいた言語調査の事例では、東京で「押しピン」呼称の方が多数を占めるとしたものが見られる[4)]。また言語による出身地鑑定のウェブサイト「方言チャート」では、2013 年公開当初は出身を東西に分けることを想定した「押しピン」の設問があったが、東日本出身者でも「押しピン」を使うという回答が多かったため、設問から外したとの説明がある[5)]。インターネットを通したアンケートでは、回答者の数が少ない場合や、年齢や属性が偏ってしまう場合があり、言語使用状況が正しく反映されない可能性もある。

そこで筆者は、アンケートとは独立に画鋲呼称の現況を

把握するため、インターネットオークションの出品データを利用した調査を行った。データは aucfan（オークファン）[6] から取得した。aucfan は大手インターネットオークションのデータから相場情報を検索するサービスを提供するウェブサイトで、過去 10 年分のオークション出品データを取得できる。

本研究の調査で用いたデータの取得と選別方法は下記の通りである。

（1）2011 年 10 月 1 日～2021 年 9 月 30 日に取引された 10 年分の「ヤフオク！」の出品データについて、出品タイトルにキーワード「画鋲」「押しピン」「画針」のそれぞれを含むものを検索し初期データを得た。検索の際には明らかに画鋲のことを指さない出品を除外するため、除外キーワードも設定した。出品地域は都道府県単位で絞り込めるため、都道府県ごとに上記の検索を行った。

（2）初期データを目視でチェックし、画鋲とは無関係の出品をさらに除外した。結果として「画鋲」を含む出品 9,387 件、「押しピン」を含む出品 1,996 件、「画針」を含む出品 1 件が抽出された。

（3）都道府県ごとに同一出品アカウントのデータは 1 件にまとめた。結果として「画鋲」を含む出品を行ったアカウント 1,879 件、同様に「押しピン」743 件、「画針」1 件が、最終データとして抽出された（以下、「件数」）。

件数を出品都道府県ごとにまとめてグラフにすると、「画鋲」が図 1a、「押しピン」が図 1b となる。図 1b からは「押しピン」が西日本で多く使用されている様子が見て

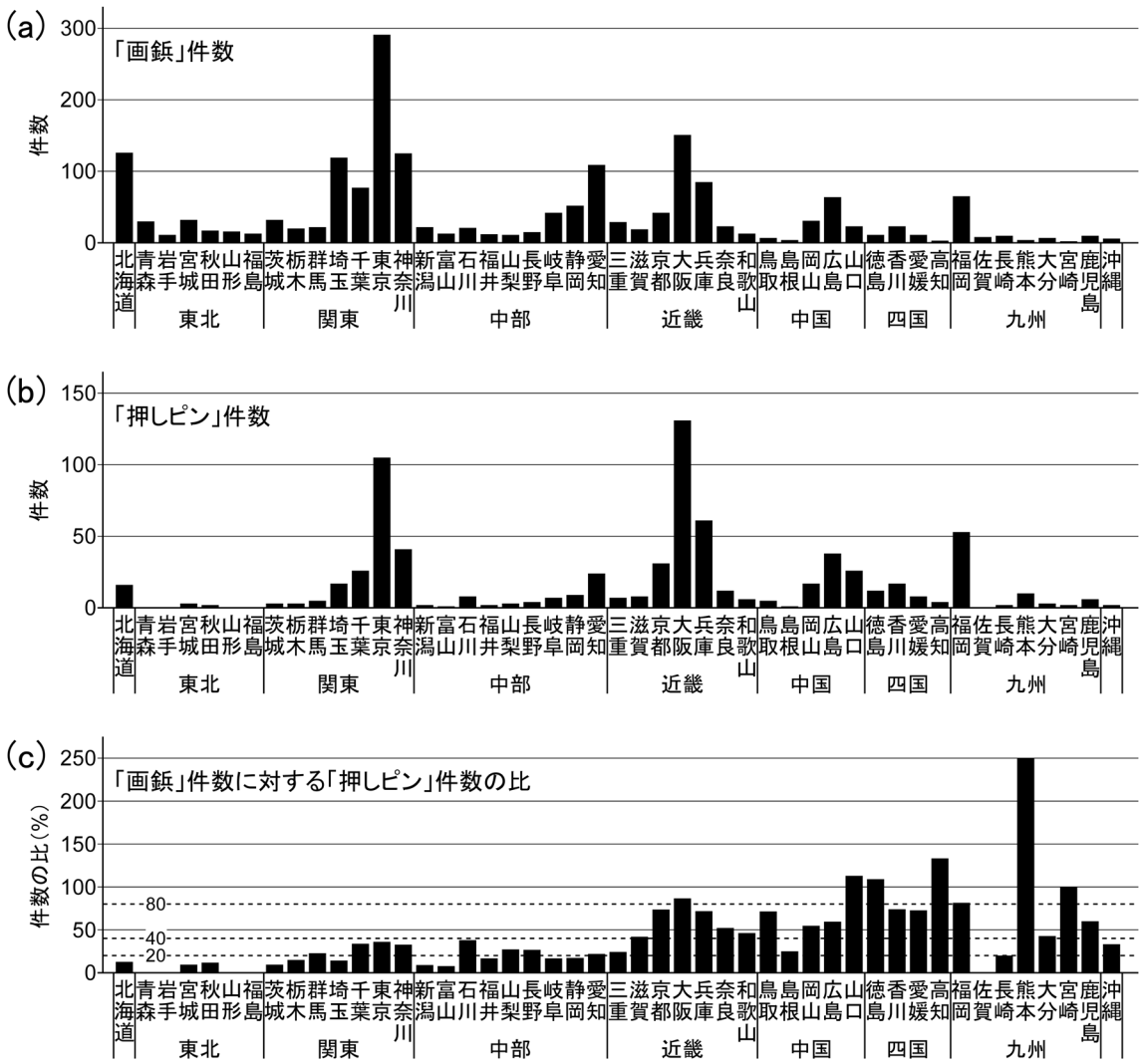

図 1　（a）最近 10 年間（2011 年 10 月 1 日～2021 年 9 月 30 日）の「ヤフオク！」で、タイトルに「画鋲」を含む出品を行ったアカウント数（＝「件数」）の都道府県分布。（b）同様に「押しピン」の分布。（c）（a）に対する（b）の比（単位：%）。

取れるが、東京や関東でも大阪や西日本と同程度用いられていることがわかる。これは西日本出身者でも関東に居住しているケースが多いことや、現在は「押しピン」が画鋲の呼称として広く認知されていること、プラスチック製のつまみのついた画鋲を「押しピン」、普通の金属製画鋲を「画鋲」と区別して呼ぶ人もいること[7] 等により、東京や関東でも出品タイトルに「押しピン」が加えられるためと考えられる。

そこで、都道府県ごとに「画鋲」件数に対する「押しピン」件数の比をとると、図 1c の分布が得られる。東京や関東でも「押しピン」の使用が多いが、それ以上に「画鋲」も多く使用されており、比を取ると目立たなくなる。北海道、東北、関東、中部では、すべての都道県で使用比率 40％未満であるのに対し、西日本の近畿、中国、四国、九州では、ほとんどの府県で 40％を、7 府県（大阪、山口、徳島、高知、福岡、熊本、宮崎）で 80％を超えており、明瞭な東西の差異が現れた。この結果から、現在でも「押しピン」が西日本で特異的に多く用いられている状況が確認された。

「画針」の 1 件は岐阜の出品であり、本調査でも岐阜における使用が確認された。岐阜での特徴的な「ガバリ」呼称は、様々な媒体で頻繁に話題に上っている[8]。岐阜の中では、特に南部の美濃地方で多く用いられているとする文献がある[9]。

3.　文献調査

画鋲が舶来当初どのように呼称されており、「画鋲」「押ピン」「画針」がいつ頃から使用されはじめ普及したのかを調べるため、入手・閲覧可能な様々な文献を用いて初出や使用状況の調査を行った。対象時期は明治期が中心であるが、その後の普及状況を調べるために一部は昭和戦中期[10] まで範囲を広げた。調査に用いた資料や方法は下記の通りである。

3−1　製図・図画・文具関連

製図・図画関連書籍や文具・事務用品・製図器具のカタログで、画鋲に関する記述や呼称を調べた。特に製図・図画については、国立国会図書館デジタルコレクション[11] で、「製図」「用器画」「図学」等を検索ワードとして、これらの単語がタイトルや見出しとして登場する文献を探索した。

表 1　1906（明治39）〜1944（昭和19）年の特許・実用新案 148 件の画鋲呼称内訳

呼称	件数	呼称	件数
「画鋲」	119	「止鋲」	2
「ピン」	9	「押鋲」	2
「押ピン」	7	「画針」	1
「鋲」	4	「留針」	1
「止ピン」	2	「鋲針」	1

3−2　知財資料

特許情報プラットフォーム J-PlatPat[12] で、画鋲に関する特許と実用新案を検索し、出願・登録時期や呼称を調べた。1945 年までの出願に限定した検索で、1906（明治39）〜1944（昭和19）年の 148 件のデータが得られた[13]。表 1 はその呼称の内訳をまとめたものである。登録商標については、明治期のものを『日本登録商標大全』〔磯村　1908, 1911〕から抽出した。

3−3 「画鋲」「押ピン」「画針」の記載

国立国会図書館デジタルコレクションで、「画鋲」「押ピン」「画針」それぞれを検索ワードとして、これらの記述が本文中に登場する文献を全文検索で探索した。文献の出版年を 1945 年までに限定すると、2024 年 3 月 4 日の検索時点で「画鋲」1,415 件、「押ピン」318 件、「画針」324 件が該当した。これらの中には画鋲とは無関係の記述も含まれているので、一つずつ文献の内容を確認して選別を行った。

4.　実物資料による製品名称の調査

画鋲が当時どのような名称で製造されていたか調べるには、実物資料の情報が最も確実である。筆者は 1997 年から国内外の古い画鋲の実物資料収集を続けている。しかし画鋲の実物資料には製造時期の情報がないので、年代の絞り込みには工夫が必要となる。本研究では、まずカタログと照合できる実物資料の製造時期を確定し、それと同型の特徴的な形状の箱が使われている資料を同時期の製品として抽出する手法を取った。結果として、次の 2 つの資料群が抽出された。

資料群 1 は、円筒形の身蓋箱で、天板と底板が側面から張り出した特徴がある（写真1）。21 商標、42 種類の実物資料が含まれる。このうち市川商店（東京）による「ウイング印」は大正 3 年の書籍に写真の掲載がある〔東京文具卸商同業組合　1914：65〕。また内田洋行（大阪）の「パ

写真 1　資料群 1 に属する実物資料の例

写真 2　資料群 2 に属する実物資料の例

イク印」は昭和 9 年のカタログに〔大庭　1934：120〕、福井商店（大阪）の「ライオン印」は昭和 9 年と 12 年のカタログ〔福井商店 1934：96; 田中　1937：48〕に、それぞれ同じデザインの図が掲載されている。また昭和戦中期の価格停止品を示す「マル停」や、公定価格品を示す「マル公」〔木村　2016〕の記入や押印があることから、昭和戦中期の販売と確認できる資料も 3 点見出された。箱の裏に使用者が「大正拾弐年」「昭和八年」と記入していることから、それ以前に製造されたとわかる資料も 1 点ずつ存在する。昭和戦後期のカタログからは同型の箱を確認できない。したがって資料群 1 の年代は、大正～昭和戦中期と推定された。

資料群 2 は、直方体形状の身蓋箱で、身・蓋ともに茶色のボール紙で作られており、天面が正方形という特徴がある（写真2）。8 商標、12 種類の実物資料が含まれる。このうち福井商店の資料は昭和 9 年と 12 年のカタログに図の掲載がある〔福井商店 1934：96; 田中　1937：48〕。同型の箱の資料はほかの期間のカタログや書籍等で確認できないことから、昭和戦前期の資料と推定した。

このようにして抽出された資料群 1 と 2 をまとめた大正～昭和戦中期の実物資料 54 種類について、箱に記載されている名称を調べた。これらに加えて、木村〔2016〕で同定された昭和戦中期の金属代用品の画鋲 29 種類のうち、箱に名称の記載がある 28 種類についても同様に調べた。結果として得られた実物資料の名称を表 2 に示した。大正～昭和戦中期の資料は、日本語名称がすべて「画鋲」であった。ただし「Drawing pin」や「Pin」と併記されているものが全体の 6 割を占め、日本語名称の記載がないものも 2 割存在する。昭和戦中期の代用品の資料では、英語名表記の割合が減るものの、名称の種類は大正～昭和戦中期の資料とほぼ同じである。例外は「ガバリ」の 1 種類のみであった。

5.　明治期の画鋲呼称と「画鋲」「押ピン」「画針」の初出

第 3 章で得られた文献から、明治期（1868～1911 年）の書籍、雑誌、カタログ、および知財資料における画鋲呼称をまとめると表 3 が得られる。文献によっては外国語名称も併記されているが、そこに見られるものはイギリス英語の「Drawing pin」（Drawing＝製図）か、アメリカ英語の「Thumbtack」である。表 2 の結果も合わせると、主たる翻訳対象語は「Drawing pin」だったと思われる。

製図・図画関連の書籍でも明治初期に画鋲について言及しているものは少なく、今回集めた中で最も早く画鋲に関する記述が登場するのは、1878（明治11）年の平瀬作五郎『画学初歩』である。本書で画鋲は「画板ニ紙ヲ留ムル針」と記されており、特定の呼称が定まっていなかった様子がわかる。続いて、多賀章人『図法一斑』で「留針」が登場する。明治 40 年までの専門書における呼称では、「とめびょう（留鋲／止鋲）」が多く用いられている。

表 3 によると、「画鋲」「押ピン」「画針」の初出は下記の通りである。

表 2　大正～昭和戦中期（左）と昭和戦中期の代用品（右）の画鋲実物資料に記載された名称内訳[14)]

大正～昭和戦中期（54 種類）		昭和戦中期の代用品（28 種類）	
名称	種類数	名称	種類数
「画鋲」「Drawing pin」併記	31	「画鋲」のみ	19
「Drawing pin」のみ	9	「画鋲」「Drawing pin」併記	4
「画鋲」のみ	8	「Drawing pin」のみ	3
「画鋲」「Pin」併記	3	「Pin」のみ	1
「Pin」のみ	3	「ガバリ」のみ	1

表 3　明治期の画鋲呼称

年	資料名	著者・出願者等	「画針」	「画鋲」	「押ピン」	その他
1878（M11）	画学初歩（第一級）	平瀬作五郎				●「画板ニ紙ヲ留ムル針」〔2〕
1881（M14）	図法一斑（二編）	多賀章人				●「留針」〔1〕
1882（M15）	用器画法（巻一）	平瀬作五郎	●〔1〕			
1887（M20）	小学用器画法（第一）	平瀬作五郎	●〔5〕			
1888（M21）	製図学講義録（第一号）	松尾鶴太郎				●「止メ針」〔1〕
	図画教授術	石倉八十七郎	●〔20〕			
1889（M22）	図学課程本（第一編）	鳥居烋夫				●「止針」〔凡例 2〕
	新撰用器画法（第三）	平瀬作五郎		●〔53〕		
1894（M27）	中等教育用器画法（上巻）	竹下富次郎				●「留メ鋲」〔5〕
1897（M30）	画学講義（幾何画法）	木元平太郎				●「留鋲〈とめびょう〉」〔16〕
	図学教科書解説（第一巻）	飯沼基次郎・寺野精一				●「留鋲」〔10〕
	用器画法（巻之一）	佐分利隆				●「留鋲」〔19〕
	福井商店発売品目	福井商店				●「押鋲」〔10〕
1899（M32）	機械設計製図学初歩	松尾哲太郎				●「留鋲」〔4〕
	独学実用製図法自在	竹貫直次				●「留鋲」〔14〕
1901（M34）	用器画法解説（再訂 21 版）（巻一）	平瀬作五郎	▲〔1〕	●〔1〕		▲「帽子針」〔1〕
	福井商店営業品目録	福井商店			●「押ピン」〔24〕	
1903（M36）	図画教授法	木村良吉		●〔16〕		
1904（M37）	新撰中等用器画教科書解説	松尾哲太郎				●「ぴん」〔7〕
1906（M39）	機械製図の手引	福田右馬太郎				●「留鋲」〔5〕
	機械設計及製図（前編）	田中不二・内丸最一郎				●「止『ピン』」〔10〕
	実用新案（実明 1957）	山田由吉				●「留針」
	国定準拠補習算術（甲種上巻）	横山徳次郎	●〔91〕			
1907（M40）	機関長受験用機械製図帖	片山清吉				●「止め鋲〈ピン〉」〔3〕
	独修自在最新製図術	湯川巌				●「止鋲」〔13〕
	実用用器画法講義	今井芳麿				●「留鋲」〔5〕
	商標（29612）	篠鶴松（大阪）			●「紙押ピン」	
1908（M41）	簡易機械製図法	岡本勝三				●「止め鋲」〔11〕「止メ鋲」〔2〕
	機械割出及製図法	市川忠一				●「止め鋲」〔3〕
	商標（34377）	篠鶴松（大阪）			●「紙押『ピン』」	
	みつこしタイムス（11, 12 月）	三越呉服店			●「押〈おし〉ピン」	
1909（M42）	実用製図学	神門久太郎				●「ピン」〔6〕
	参考用器画法	須永輿平				●「留鋲」〔1〕
	商標（38757）	上塚万次郎（大阪）			●「紙押『ピン』」	
	商標（38758）	上塚万次郎（大阪）			●「紙押『ピン』」	
	商標（38866）	久保木智（広島）			●「紙押『ピン』」	
	みつこしタイムス 7（1–3）	三越呉服店			●「押〈おし〉ピン」	
	みつこしタイムス 7（4–7, 9–13）	三越呉服店			●「押〈おさへ〉ピン」	
	洋画材料品日本画用品明細目録	絵画講習会販売部		●〔値段表 16〕		●「ピン」〔30〕
	実用新案（実明 13967）	正阿彌盛行（東京）		●		
	実用新案（実明 14351）	山田由吉（東京）		●		
1910（M43）	用器画法講義	大原鉦一郎				●「留鋲」〔3〕
	最新用器画法	佐野正造・宮崎茂三				●「ぴん」〔2〕「ピン」〔2〕
	商標（39519）	市川喜七（東京）			●「紙押『ピン』」	
	商標（40360）	深井庄八（大阪）			●「紙押『ピン』」	
	商標（43821）	中西儀助（大阪）			●「紙押『ピン』」	
	商標（43852）	深井庄八（大阪）			●「紙押『ピン』」	
	みつこしタイムス 8（1, 2, 10）	三越呉服店			●「押〈おさへ〉ピン」	
	図画講義	大原鉦一郎		●〔7〕		
1911（M44）	実用機械製図学（上巻）	大石聞二				●「止め『ピン』」〔2〕
	言文一致用器画法講義	明治中学会				●「留メ鋲」〔24〕「留め鋲」〔目次 3〕
	実用新案（実明 21646）	北山心寂（兵庫/東京）				●「鋲針」
	みつこしタイムス 9（1）	三越呉服店			●「押〈おさへ〉ピン」	
	三越 1（4）	三越呉服店			●「押〈おし〉ピン」	
	京浜イロハ地理（高洲幹一著）	正阿彌盛行		●〔97〕		
	特許（特明 19463）	篠崎又兵衛（東京）		●		

※各資料における呼称を「画針」、「画鋲」、「押ピン」、「その他」、の 4 項目に分類して「●」で表示。同一資料で複数の呼称があり、主呼称と副呼称の区別が明瞭な場合は、主呼称を「●」、副呼称を「▲」で示した。「画用止針」「製図用画鋲」等の「用」以前は省略した。「その他」は具体的な呼称を記号の右側に示した。「押ピン」も見出し語と表記が異なるケースや、読み方に揺らぎがあるケースが見られるため、具体的な呼称を記号の右側に示した。読み仮名が記載されている場合は〈　〉内に示した。

※書籍・雑誌・カタログは発行年、特許・実用新案・商標は登録年。知財情報は出願地を「著者・出願者等」の（　）内に示した。商標は磯村〔1908, 1911〕に基づく。各年における掲載順は、「その他」→「画針」→「押ピン」→「画鋲」とした。書籍・カタログは掲載ページを〔　〕内に示した。詳細な書誌情報は〈引用・参考文献〉欄に記載した。

「画針」：平瀬作五郎『用器画法』1882（明治15）年
「画鋲」：平瀬作五郎『新撰用器画法』1889（明治22）年
「押ピン」：福井商店『福井商店営業品目録』1901（明治34）年

表 3 からは、明治 30 年代まで「画針」「画鋲」「押ピン」はどれも目立って資料が多いわけではないことと、「押ピン」は明治 40 年から、「画鋲」は明治 42 年から、それぞれ使用事例が増加していることがわかる。「ピン」を含む呼称としては、「押ピン」のほかに「とめピン」あるいは単なる「ピン」も頻用されているが、これらは明治 20 年代以前には見られず、明治 30 年代半ば以降に急増する様子が見て取れる。

この結果を踏まえて第 7〜9 章では、「画針」「画鋲」「押ピン」呼称が地域差を伴って定着した背景について、それぞれ考察する。その前に第 6 章では、平瀬作五郎の略歴について触れておきたい。「画針」「画鋲」ともに初出は平瀬作五郎の著書であり、これらの呼称の創出や普及に関するキーパーソンと考えられるためである。

6.　平瀬作五郎

平瀬作五郎（1856〜1925）（写真3）は、一般的には植物学者として有名で、イチョウの精子を 1896 年に発見した業績により恩賜賞を受賞するなど、国内外に広く知られている。しかしもともとは図画教員・画工としてのキャリアを持ち、用器画や図画に関する教科書を精力的に執筆していた。以下の略歴は、小野〔1983a–1985b〕、本間〔2004〕、柏谷・吉田〔2020〕、柏谷〔2021〕から、特に図画に関する経歴を重点的に抜粋したものである。

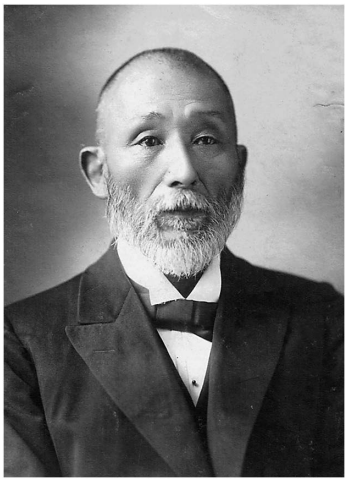

写真 3　平瀬作五郎（デジタルアーカイブ福井[15)]）

平瀬作五郎は、1856（安政3）年に現在の福井市で、福井藩士の長男として生まれた。福井藩藩校として創設され、明治維新後も独自の学制で運営されていた明新舘中学（現・福井県立藤島高等学校）に入学し、お雇い外国人グリフィスから自然科学や図画を学んだ。また同時期に加賀野井成是から油絵を学んでいたようである。1872（明治5）年に 16 歳で卒業後、同校の図画教員助手として就職したが、1 年半後に退職・上京し、山田成章に師事して本格的に図画修行を行った。

1875（明治8）年 9 月に、岐阜県の中学・遷喬館に図画教員として就職した。この学校は現在の岐阜県立岐阜高等学校の前身で、1877 年に岐阜県第一中学と改称、1880 年に岐阜師範学校と合併して岐阜県華陽学校（中学部・師範部）に改称された。1883 年には岐阜県農学校も合併され同農学部となっている。平瀬は合併前の 1877（明治10）年から岐阜師範学校教員を、1880（明治13）年から岐阜県農事講習所（農学校の前身）教員を、それぞれ兼務している。1887（明治20）年に退職するまでの 13 年の教員生活の間に、図画教科書として『画学初歩』（1878 年）、『用器画法』（1882〜1883 年）、『図画指要』（1885 年）、『小学用器画法』（1887 年）を出版した。

1888（明治21）年、帝国大学理科大学（現・東京大学理学部）に画工として雇用され、植物学教室で論文に掲載する図などを制作した。1889 年以降、本邦初の洋風美術団体・明治美術会の創立と運営にも携わった。東京時代に新たに出版した図画教科書に、『新撰用器画法』（1889 年）、『初学画本』（1889 年）、『中等教育用器画』（1894 年）がある。1893（明治26）年からはイチョウの研究にも取り組むようになり、1896（明治29）年、イチョウの精子を発見し、世界初の裸子植物の精子発見者として名を馳せた。

ところが翌 1897（明治30）年、突如帝国大学を退職し、教諭心得として滋賀県尋常中学校（現・滋賀県立彦根東高等学校）に赴任した。帝国大学退職の理由を本人が語ることはなかったが、大学における教授間の対立に巻き込まれるなど不本意なものであったらしいと伝えられている。1905（明治38）年に京都の私立花園学林（現・花園学園）に異動し、以後 1924（大正13）年に病気で退職するまでかかわり続けた。島津製作所の標本部顧問や大阪府立高等医学校予科の講師も務めたほか、新たな図画教科書『中等新用器画法』（1907 年）を出版した。1912（明治45）年にイチョウ精子発見の業績により、第二回恩賜賞を受賞した。晩年は南方熊楠との共同研究でも知られている。1925（大正14）年、68 歳で永眠した。

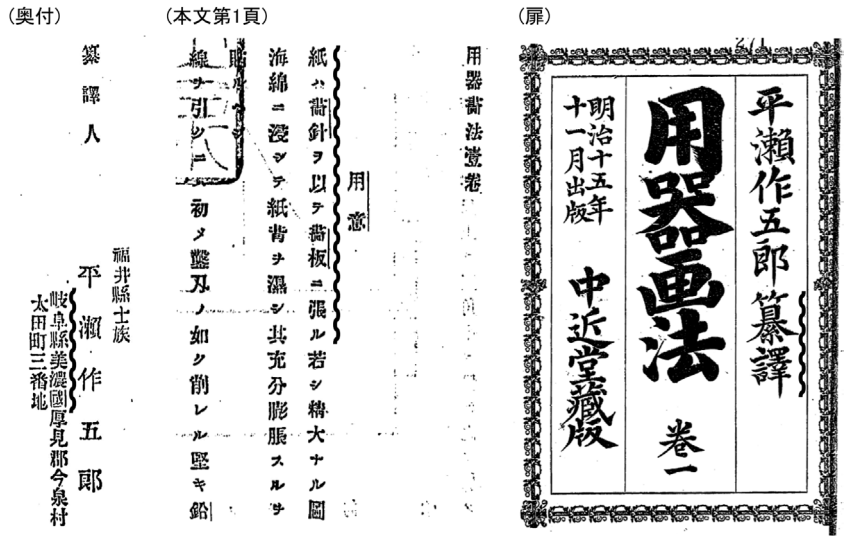

図 2　平瀬作五郎『用器画法（巻一）』（1882 年）の（右）扉、（中央）本文第 1 頁、および（左）奥付の一部（国立国会図書館デジタルコレクション）。傍波線は筆者による。

7. 「ガバリ」

第 5 章でみたように「ガバリ」の初出は、平瀬作五郎『用器画法』（1882 年）である。図 2 にその扉と本文第 1 頁、奥付の一部を示す。「画針」は本書の記述の最冒頭で「紙ハ画針ヲ以テ画板ニ張ル」と登場する。画用紙を留める専門器具として、画板と画針は対で呼称されている様子がわかる。扉の「平瀬作五郎纂訳」からわかる通り、本書は英文原書の翻訳のうえに、平瀬が独自の記述を加えたものであり[16]、専門用語のうち和訳が定まっていないものは、平瀬が翻訳語を創出したと考えられる。用器画関連書籍は平瀬の著書と前後してほかにも出版されているが、画鋲のように製図器具の中では周縁的と考えられる器具にまで触れている著者は平瀬のほかにはほとんどない。邦文書籍の中でも、舶来品である画鋲を紹介した最初期の部類といえる。平瀬が本書の前に著した『画学初歩』（1878 年）では「画板ニ紙ヲ留ムル針」と名称が定まっていなかったことからも（表 3）、「画針」は平瀬の翻訳語である可能性が高い。

『用器画法』（全三巻）は中学校生徒用の教科書であり、平瀬の著した教科書の中でも最も評価が高く、ロングセラーとなった。巻一は 1882～1943 年の 62 年間に亘って出版され 47 版を、巻二は 1882～1941 年に 34 版、巻三は 1883～1941 年に 36 版を重ねており、「平瀬は大いに自信をもち、ひじょうに満足して、誇りにさえ思っていた」という〔小野 1984d：212〕。1897（明治30）年の『尋常中学科講義録』でも「今其最も普通に行はるゝものは平瀬作五郎氏著の用器画法なるを以て、読者の同書により其詳細なる方法を学はれむことを望む」〔中学講習会 1897：52〕と述べられており、教科書としての高い普及度がわかる。

このように教科書そのものの影響力が高かっただけではなく、平瀬自身が中学校と師範学校の教員であり、生徒と教師を直接教える立場として用語普及に極めて高い影響力を持っていた。上村〔2000〕は、県単位の言語普及に学校や教師がかかわっている可能性を指摘しているが、平瀬は岐阜における学校系統の言語普及のまさに源流にいた。第 2 章でみたように、現在「ガバリ」は美濃地方でより多く用いられているという指摘がある。平瀬が勤めていた岐阜県華陽学校も、平瀬の当時の居所も、岐阜県美濃国厚見郡今泉村（現在の岐阜市）に位置しており、その周囲でより強力に「画針」が普及したためと見ることができる（図 2 参照）。

「画針」はその後、愛知県でも使用された。大正～昭和戦前期には、中京地域の有力文具業者である西村淺治郎商店（名古屋）が「画針」呼称を用いていたことが、1919（大正8）年の実用新案[17]、および 1925（大正14）年と 1928（昭和3）年の広告〔坂本 1925：333, 1928：328〕で確認できる。次章で述べるように、この時期すでに全国では「画鋲」が正式名称として確立されていたが、西村商店は一貫して「画針」を使用していた。このことで西村商店の勢力範囲であった中京地域に、「画針」がさらに普及したと考えられる。

表 2 で挙げた昭和戦中期の代用品のうち、製品名称に「ガバリ」表記が見られる実物資料の箱には、「大日本 東

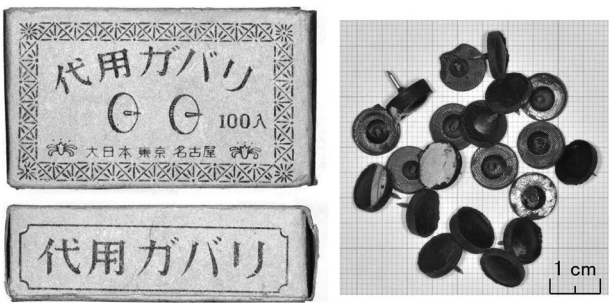

写真 4　昭和戦中期の実物資料「代用ガバリ」の箱（左）と中の画鋲（右）。画鋲はレコード盤製〔木村 2016, 2019〕。

京 名古屋」との記載がある（写真4）。これは昭和戦中期の名古屋で、「ガバリ」呼称が定着していたことを示す。また当時すでに漢字表記が不明となっていた様子も窺える。この資料の画鋲はレコード盤製であり、太平洋戦争期末期に製造されたものと考えられる〔木村 2016, 2019〕。戦争激化に伴う地方の分断によって、地方独自の呼称が製品名称として顕現した事例と思われる。現在の愛知では「画鋲」が優勢で、「ガバリ」は岐阜のみとされるが〔篠崎・毎日新聞社 2008：24–25; 山田 2008：39〕、これは中京地域に普及していた「ガバリ」が、のちに「画鋲」で上書きされ、岐阜にのみ残った結果と推察できる。

8. 「画鋲」

現時点での「画鋲」の初出は、平瀬作五郎『新撰用器画法』（1889 年）で（第 5 章）、巻末の「用器画法用語対訳表」に「Drawing pin」の訳語として登場する〔平瀬 1889：53〕。本書の出版時、平瀬は帝国大学理科大学の画工として東京にいた。前著で用いた「画針」から「画鋲」に変更した理由は不明だが、平瀬自身が「画針」に不便を感じ「画鋲」を創出した可能性や、当時周囲ですでに「画鋲」が使用されており、それに倣った可能性が考えられる。本書の 12 年後に出版された『用器画法解説（再訂 21 版）』では、「画鋲（画針又ハ帽子針ト称）」〔平瀬 1901：1〕との記述があり、「画針」を引き続き用いつつも「画鋲」を主呼称と位置付けていることがわかる。しかしこの頃でもほかの文献で「画鋲」を使用した事例は少なく、画鋲呼称としては「とめびょう」が全盛であった（表 3）。

状況の変化が見られるのは、特許・実用新案で画鋲に関する出願が現れて以降である。日本における特許制度は、専売特許条例が施行された 1885（明治18）年に、実用新案制度は、実用新案法が施行された 1905（明治38）年に始まったが、画鋲に関する公告が確認できるのは 1906（明治39）年の実用新案からである（第 3–2 節、表 3）。この時は「留針」が用いられていたが、出願順で 2 件目の 1909（明治42）年の出願では、同一人と思われる出願者・山田由吉が「画鋲」を用いている。これより後の明治期には、特許 1 件と実用新案 2 件の出願が確認できるが、うち 2 件が「画鋲」を使用しており、特許・実用新案では明治 40 年代から「画鋲」が正式名称と位置付けられたものと考えられる。1906（明治39）～1944（昭和19）年の特許・実用新案で用いられている画鋲呼称（表 1）でも、「画鋲」は 80％と圧倒的に多数を占めており、製造業者の間では「画鋲」が正式名称として認知されていたことが裏付けられる。

画鋲の国産化は、明治 30 年代半ばから始まったと考えられる。現時点で記録が見つかっている中で最も早い画鋲製造業者の始業年は、竹屋製作所（大阪）の 1902（明治35）年であり、鈴木福次（大阪）の 1905（明治38）年、阪田久五郎（呉）の 1909（明治42）年、山田萬吉兄弟工場（広島）の 1912（明治45）年がそれに続く〔森井 1929：97–99〕。また始業年は不明だが、篠鶴松（大阪）以降複数の業者が 1907（明治40）～1910（明治43）年に画鋲の商標登録をしている（表 3）。したがって明治 40 年代は、国内で画鋲製造・販売業者が増えて販路が開拓されている時期といえ、そのような折に特許・実用新案で「画鋲」が正式名称として用いられたことは、「画鋲」呼称の普及を強力に後押ししたと考えられる。

第 4 章で抽出した大正～昭和戦中期の実物資料の箱に記載された名称は、日本語のものはすべて「画鋲」であった（表 2）。昭和戦中期の代用品の資料に見られる名称も、「ガバリ」の 1 件を除いてすべて「画鋲」であり（表 2）、日常における「画針」や「押ピン」といった通称とは無関係に、製造業者では名称に「画鋲」を用いることを徹底していた様子がわかる。

9. 「押しピン」

現時点での「押しピン」呼称の初出は、輸入文具卸売業者であった福井商店（現・株式会社ライオン事務器）によるカタログ『福井商店営業品目録』（1901 年）で用いられた「押ピン」である（第 5 章）。

福井商店は 1792（寛政4）年、今津屋小八郎が大阪心斎橋で創業した筆墨商を起源とする。1869（明治2）年に三代目・福井正治郎が、文明開化で大阪川口に設けられた外

表 4　福井商店の昭和戦前期以前のカタログでの画鋲呼称

出版年	呼称	資料
1897（M30）	押鋲	『福井商店発売品目』〔福井商店 1897：10〕
1901（M34）	押ピン	『福井商店営業品目録』〔福井商店 1901：24〕
1912（T1）	画鋲	『福井商店営業品第 5 回目録』〔福井商店 1912：103〕
1921（T10）	画鋲	『株式会社福井商店営業品型録』〔福井商店 1921：146〕
1933（S8）	画鋲	『ライオン製図機械型録第 9 版』〔福井商店 1933：37〕
1934（S9）	画鋲	『株式会社福井商店営業品型録』〔福井商店 1934：96〕
1935（S10）	画鋲	『ライオン製図器型録第 10 版』〔山本 1935：45–46〕
1937（S12）	画鋲	『株式会社福井商店事務用品目録』〔田中 1937：48, 126〕

国人居留地に出向き、様々な欧米文具を仕入れ舶来物品商も営んだ。1890（明治23）年には欧米文房具商として輸入契約を結び、1897（明治30）年に第 1 号のカタログ『福井商店発売品目』を発行した〔ライオン事務器社史編集委員会　1992, 1993〕。「押ピン」の初出が見られる『福井商店営業品目録』は、第 2 号のカタログである。

この「押ピン」の初出は、「画針」や「画鋲」の初出からは 10 年以上遅れており、今後資料が増えれば初出が遡る可能性も否定できない。しかし第 5 章で述べた通り、表 3 からは「ピン」が含まれる呼称が明治 30 年代半ば以降に急増している様子が読み取れる。亀井他〔2007：364–382〕は明治翻訳語の傾向について、次のような指摘をしている――明治初期には漢語が流行・氾濫しており、翻訳語もほとんど一様に外国語を漢語化することで創出された。しかし明治 20 年代頃から、漢字表記に原語の音を転写した振り仮名をつけた語や、そのままカタカナ書きした語が受け入れられるようになった。とりわけ、日常と専門との間を往来するような実用語がとった形式は様々であった。明治 40 年代には、和語・漢語と外来語との混種語（「記念スタンプ」、「インキ壺」、「食パン」など）が増えた――。混種語である「押ピン」も同様な経緯で誕生したと考えると、三呼称の中で最も遅く登場するのも妥当と感じられる。

表 4 は福井商店の昭和戦前期以前のカタログにおける画鋲呼称の変遷を示す。第 1 号のカタログでは「押鋲」が用いられていたが、第 2 号で「押ピン」に変わり、1912（大正元）年の第 5 号以降は「画鋲」に変更されている。第 3 号、第 4 号のカタログは現在資料がなく、「押ピン」が用いられた正確な期間は不明だが、カタログ上での使用期間は長くて 10 年程度と思われる。ただ、当時の別の書籍で「鋲」に「ピン」と振り仮名を振った事例が見られることから〔片山　1907：3〕（表 3）、このような読み方がもし福井商店でもなされていたなら、最初のカタログの時点で「押ピン」と呼称されていることになり、使用期間はさらに延びる。

1907（明治40）年以降は、登録商標の品目名として「紙押ピン／紙押『ピン』」と記載した事例が増加しており、「画鋲」に先んじて「押ピン」が公文書に用いられた様子が見て取れる（表 3）。明治期に本呼称で登録した業者の所在地を見ると、大阪 4（篠鶴松、上塚万次郎、深井庄八、中西儀助）、広島 1（久保木智）、東京 1（市川喜七）となっており、大阪中心の呼称であることがわかる。中でも、最初に本呼称で登録を行った篠鶴松は、独立前に福井商店で仕入れ担当を任されていた人物であり〔ライオン事務器社史編集委員会　1993：35, 51〕、福井商店における呼称に強く影響されていたものと考えられる。

第 2 章で確認したように「押しピン」は現在西日本一帯で使用されており、「画針」のような県単位のものとは別の、より広域な普及メカニズムが働いたものと考えられる。明治 30 年代初期の福井商店は、「東京の市川商店と文房具業界を二分する勢い」であり、大阪市内や京阪神には毎日訪問販売をしていた。地方との取引は通信が主であったが、「もっと後になると、北陸、山陽筋や九州方面にも定期的に出張するようになった」という〔ライオン事務器社史編集委員会　1993：36〕。したがって福井商店は、明治 30 年代には西日本全域に強い影響力を持っていたと考えられる。

上村〔2000〕による「ラーフル」の論考では、大阪の業者の呼称が、業者の勢力範囲であった西日本一帯に広まったとする考察を展開した。「押ピン」の初出である『福井商店営業品目録』には「ラーフル」も掲載されているうえ、『日本登録商標大全』〔磯村　1908, 1911〕からは、「紙押ピン／紙押『ピン』」で商標登録を行った業者のほとんどが、「ラーフル」についても同時に登録を行っていることがわかる。このことは「押ピン」が「ラーフル」と同様の普及メカニズムで普及した可能性を示唆する。以上のことを総合すると、福井商店が西日本における「押ピン」呼称普及を駆動したと考えることが、現時点で最も妥当といえる。

1908（明治41）年からは、三越がカタログで「押ピン」を用いている（表 3）。当カタログにおける読みは、当初の「おしぴん」から一旦「おさへぴん」に変わり、その後また「おしぴん」に戻っており、混乱が読み取れる。先述した福井商店における「押ピン」と、その後の商標登録における「紙押ピン／紙押『ピン』」との表記揺れも示すように、明治 30～40 年代には、「押ピン」呼称は定着の途上にあったと推察される。また現在は「指で押して刺し留める」ために「押しピン」と呼ばれるイメージがあるが、

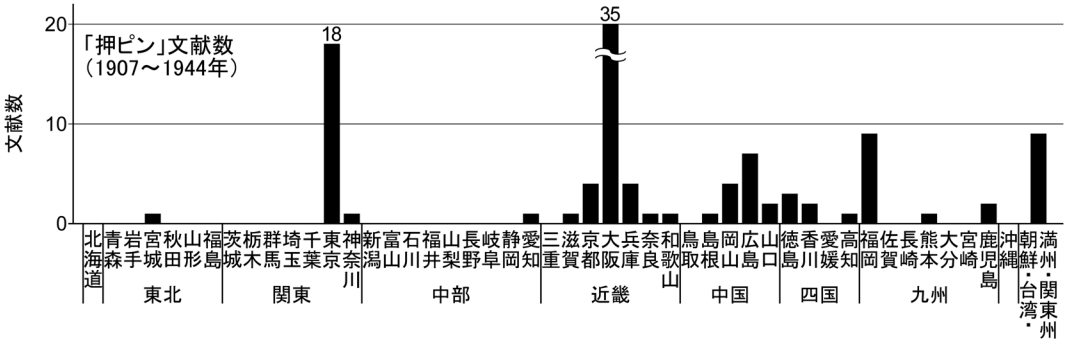

図 3　明治期から昭和戦中期（1907～1944 年）における「押ピン」の記載がある文献数。出版時点での著者の居住地、著者の所属機関や事業所の所在地で分類し、同一著者の文献は 1 件にまとめた。文献数が最大の大阪は波線で一部を省略し、次点の東京とともに数値を上部に示した。

当初は「紙を押し留める」というニュアンスで用いられていた様子がわかる。いずれにしても、「画鋲」が正式名称として伝播する前に、大阪発の「押ピン」は西日本一帯に定着したものと考えられる。

図 3 は、第 3–3 節で得られた「押ピン」の記載がある文献のうち、出版時点での著者の居住地、著者の所属機関や事業所の所在地がわかるものを、現在の都道府県および当時の外地（朝鮮・台湾・満州・関東州）で分け、同一著者のものは 1 件にまとめて表示した図である。文献の期間は 1907（明治40）～1944（昭和19）年である。出版時点での居住地のため、著者の出身を正確に示していないケースも混ざっていると思われるが、「押ピン」は西日本一帯で広く使用されており、現在の「押しピン」分布（図 1b）と似たパターンが得られている。このことは、西日本における「押しピン」分布が、昭和戦中期までに形成されていたことを示し、上記の考察と整合する。

また図 3 からは、「押ピン」が外地でも多く使用されていたことがわかる。特許・実用新案でも、「押ピン」が最も早く使用された事例は、1917（大正6）年の関東州旅順市からの出願である[18]。福井商店は明治・大正期から外地で精力的に販路の開拓を行っていた。朝鮮との貿易には 1904（明治37）年からかかわっており〔ライオン事務器社史編集委員会　1993：39–41〕、大正の初め頃には上海・満州の業者と取引を始めていた〔ライオン事務器社史編集委員会　1993：111〕。こうした経緯で外地にも比較的早く「押ピン」が広まった可能性が考えられる[19]。

登録商標や三越の事例が示すように、「押ピン」は一時期正式名称に準じ、全国的にも用いられていたものと考えられる。昭和初期の百科事典や国語辞典の記述からは、「押ピン」呼称が広く普及していた様子が窺える。1933（昭和8）年出版の『大百科事典』では、「鋲」の項目に「押ピンの別名」との説明がある〔下中　1933：9〕。また 1938（昭和13）年出版の『言苑』では、「鋲」の説明に「画鋲。押ピン。」とある〔新村　1938：981〕。一方、1936（昭和11）年出版の『国民百科大辞典』では、「鋲」の項目に「画鋲又ハ留鋲ト称」するとだけあり、「押ピン」への言及はみられない〔冨山房百科辞典編纂部　1936：151〕。このように書籍によって「押ピン」の扱いにはばらつきがあるが、「押ピン」を主呼称として扱うものや、「画鋲」と同列に扱うものが見られる。百科事典や国語辞典では地域差に関する情報は得られないが、「押ピン」が昭和初期に一般に広く普及していた呼称であったことがわかる。

今回の実物資料の調査からは、「押ピン」という名称が記載された実物資料は見いだせなかった。これは、製造業者の間では比較的早い時期から「画鋲」が正式名称として認知されたことによると考えられる（第 8 章）。しかし特筆すべきは、大正～昭和戦中期の実物資料では、製品名称として「Drawing pin」や「Pin」のみしか書かれていない資料も、全体の 2 割程度存在することである（第 4 章、表 2、写真 1、2）。こうした製品が多かったことで、西日本では一度普及した「押ピン」呼称が、遅れて普及した「画鋲」で上書きされにくく、現在まで通称として強固に残った可能性が示唆される。

10.　結語

本稿では現代日本における画鋲呼称の地域差を取り上げ、文献や実物資料を用いてその成立時期や普及過程の考察を行った。本稿で得られた結果は下記の通りである。

（1）幕末～明治初期に日本に製図器具として渡来した画鋲は、当初は様々に呼称されていた。明治 40 年までの専

門書における呼称で特に多く認められるものは「とめびょう（留鋲／止鋲）」である。

(2)「画針（ガバリ）」は、1875〜1887（明治 8〜20）年に岐阜の図画教員であった平瀬作五郎が翻訳語として教科書に記載し、自身も中学校や師範学校で教育活動を行ったことで岐阜県内に普及したと考えられる。大正〜昭和戦中期には、名古屋の有力文具業者が用いるなど、愛知にまで普及していたことも確認された。

(3)「押（し）ピン」は、大阪の有力な輸入文具卸売業者であった福井商店が明治 30 年代に使用したことで、その影響下にあった西日本の文具業者を通じて西日本一帯に普及したと考えられる。明治 40 年代には登録商標の品目名に用いられ、三越も使用するなど、正式名称に準ずる地位にあった。

(4)「画鋲」は 1889（明治22）年の平瀬作五郎の教科書に早くから記載が見られるが、明治 40 年代に特許・実用新案の品目名として用いられ、正式名称としての地位を獲得したと考えられる。画鋲の国産化が進み、「画鋲」という名称で広く製造・販売が行われるようになったことで、全国に定着したものと思われる。

舶来当初、専門性の高い器具であった画鋲は、これら三呼称の普及とともに、一般にも浸透していったと考えられる。本稿の分析を通して、最初期の図画教員として用器画の普及を牽引した平瀬作五郎の活躍や、画鋲の輸入販売から国内生産に至るまでの業界の様子が浮かび上がってきた。「画針」や「押ピン」は、画鋲の国内生産が本格的に始まる前の呼称であり、一部の例外を除き、製品の名称として用いられた事例は確認されなかった。それにもかかわらず、現在なお「気づかない方言」として、生活者に意識されずに使い続けられている。このことは両語がそれだけ印象強く、親しみ深い通称として受け入れられて、生活の一部に溶け込んだことを示している。特に「画針」は、昭和戦中期に既に漢字表記が不明のまま使用されていた状況が見受けられ、口承伝播の性格が強かったことが浮き彫りとなった。まさしく言葉の中に刻まれた、舶来品が生活の中に定着していく過程の記憶を呼び起こすことができたといえる。

平瀬作五郎は自然科学者として著名である一方、図画教員としての業績がクローズアップされることはあまりなかった。本研究により、平瀬の足跡が没後 100 年近くを経てもなお、現代日本語の地域差として色濃く残ることが明らかとなり、改めてその業績の大きさが確認された。

本稿における分析の多くは、国立国会図書館デジタルコレクションの拡充に負っている。2022 年 12 月のリニューアルによって全文検索可能なデジタル化資料が 5 万点から約 247 万点に増加し、従来の見当たり捜査的な資料収集から脱し、言語使用状況の網羅的な分析が可能となった[20]。本稿で行ったような分析は、ほかの舶来品の呼称や明治翻訳語の成立時期を調べる際にも有効と考えられる。

本稿の考察は現時点で入手可能な情報のみに基づいたものであり、今後の資料拡充で初出は更新される可能性がある。また「画鋲」が特許・実用新案で正式名称として定着した経緯など、依然として不明な点も多い。今後も資料の収集を続け、より考察の確度を高めていきたい。

謝辞

本稿執筆のきっかけは、株式会社ミツヤの塚田征司氏と、株式会社スタッフラビの山下颯太氏、鎌田隼人氏からいただいた。株式会社ライオン事務器の馬場力氏は、福井商店関連等の多くの資料を取りまとめご恵送下さった。同社の松崎なつみ氏は、社史を長期間貸し出して下さった。東北大学方言研究センターの小林隆氏は、方言学の研究動向をお教え下さり、「気づかない方言」に関する文献を多数ご紹介下さった。早月すゞ氏には明治翻訳語に関する文献を紹介していただいた。

本稿は、2023 年 6 月に日本生活学会第 50 回研究発表大会で発表した内容を膨らませたものである。本発表では、高田知和氏、林春伽氏、矢野弘登氏、池原優斗氏、藤沢レオ氏、鈴木俊介氏、中津ひかる氏、山田璃々子氏や、そのほか多くの方から、研究へのコメントや温かい激励の言葉をいただいた。実物資料の収集は、野口聡氏、石部誠氏、大塚銑二氏、貫地谷麻由子氏、岸田知子氏、見城雅夫氏、杉山陽一氏、高木秀道氏、長嶋康郎氏や、そのほか多くの方のご助力がなければ為し得なかった。記して感謝する。

〈注〉

1）有形の「物」と無形の「もの」とを合わせて「モノ」と呼ぶ〔印南他　2002：3〕。

2）山田敏弘「美濃ことば 飛騨ことば 102 がばり」『中日新聞』2022.10.7

3）例えば、宇田川〔2009：229–230〕; 関西テレビ『快傑えみちゃんねる』2018.11.16; NHK『チコちゃんに叱られる!』2024.1.19

4）J タウン研究所「「画びょう VS 押しピン」どっちがしっくりくる？ 全国調査でわかった東西差」2021.6.25. https://j-town.net/2021/06/25323848.html?p=all

5）梶田育代「ことばの広場 校閲センターから 押しピンと画びょう」『朝日新聞』2016.8.10

6）https://aucfan.com/

7）例えば、上記5）の記事。ダルマ型のつまみがついた画鋲は、ガラス製のものが大正期から写真の現像時等に用いられていたことが確認できるが〔飯田　1922：29〕、普及したのはプラスチック製品が輸入されるようになった 1960 年代以降である〔殖田　1984〕。
8）例えば、山田〔2008：39〕;「「誰もきーひんた」って？」『中日新聞』2014.4.9; 督あかり「故郷誇ろう「岐阜あるある」」『中日新聞』2015.1.7; 朝日放送テレビ『上沼恵美子のおしゃべりクッキング』2019.12.20; 読売テレビ・中京テレビ『気になる情報のウラのウラ　上沼・高田のクギズケ !』2022.11.20
9）立石智保「すっきりさせます 53 岐阜県は東日本？西日本？」『中日新聞』2021.7.5
10）本稿では、1926～1937 年を「昭和戦前期」、1937～1945 年を「昭和戦中期」と呼ぶ。「昭和戦中期」は、1937 年 7 月～1941 年 12 月の「日中戦争期」と、1941 年 12 月～1945 年 8 月の「太平洋戦争期」に分けられる。これ以降は「昭和戦後期」と呼ぶ。
11）https://dl.ndl.go.jp/ja/
12）https://www.j-platpat.inpit.go.jp/
13）「特許・実用新案分類照会（PMGS）」において、次の FI（File Index）を指定して検索を行った：B43M15/00@A（製図用ピン、画鋲）；B43M15/00@B（画鋲容器、画鋲抜き、画鋲打ち）；F16B15/00@P（画鋲）。呼称が現在のものと異なる場合、画鋲に関する出願であることは、①製図器具であること、②手などで簡単に抜き刺しできること、③紙等を台や壁に保持する目的で使用されること、④図や記述からわかる形状・機能が現在の画鋲と一致すること、の 4 条件で確認し、いずれかに当てはまるものを抽出した。
14）「Drawing pins」のように複数形が用いられているものは単数形にまとめた。
15）https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/
16）原〔1970：45〕において、E. A. Davidson の教科書を種本としつつ、独自の著作を成したものと考察されている。
17）実用新案（実明 51099）、1919 年 7 月 2 日出願。
18）特許（特明 31302）、1917 年 6 月 6 日出願。
19）「鋲」が国字であり外地で受け入れられないことも関係しているかもしれない。現在の韓国語では画鋲を「압정（押釘）」または「압핀（押 pin）」と呼ぶ〔安田他　2006：1558-1559〕。
20）国立国会図書館プレスリリース「「国立国会図書館デジタルコレクション」をリニューアルしました」2022.12.21

〈引用・参考文献〉

中学講習会（編）　1897『尋常中学科講義録 図画科』
藤原与一　1955「日本語というもの（第 4 回）―日本語の語詞―」『学校教育』第 457 号，pp. 90-94
福田眞人　2008「明治翻訳語のおもしろさ」『言語文化研究叢書』第 7 号，pp. 133-145
福田右馬太郎（編）　1906『機械製図の手引』製図夜学館
福井商店　1897『福井商店発売品目』
福井商店　1901『福井商店営業品目録』
福井商店　1912『福井商店営業品第 5 回目録』
福井商店　1921『株式会社福井商店営業品型録』
福井商店　1933『ライオン製図機械型録第 9 版』
福井商店　1934『株式会社福井商店営業品型録』
冨山房百科辞典編纂部（編）　1936『国民百科大辞典（第 11 巻）』冨山房
原正敏　1970「明治初期の図学教育（I）―東京大学を中心に―」『図学研究』第 4 巻第 2 号，pp. 37-49
早野慎吾　2016「気づかない方言」井上史雄・木部暢子編『はじめて学ぶ方言学―ことばの多様性をとらえる 28 章―』ミネルヴァ書房，pp. 80-87
平瀬作五郎　1878『画学初歩（第一級）』東崖堂
平瀬作五郎（纂訳）　1882『用器画法（巻一）』中近堂
平瀬作五郎　1887『小学用器画法（第一）』金港堂
平瀬作五郎（編）　1889『新撰用器画法（第三）』金港堂
平瀬作五郎　1901『用器画法解説（再訂 21 版）（巻一）』丸善
本間健彦　2004『「イチョウ精子発見」の検証 平瀬作五郎の生涯』新泉社
市川忠一（編）　1908『機械割出及製図法』建築書院
飯田早秋　1922『ゴム印画の研究』芸術写真社
飯沼基次郎・寺野精一　1897『図学教科書解説（第一巻）』共益商社
今井芳麿　1907『実用用器画法講義』金刺芳流堂
印南敏秀・神野善治・佐野賢治・中村ひろ子（編）　2002『もの・モノ・物の世界―新たな日本文化論―』雄山閣
井上史雄　1983「ジュニア言語学 気づかない方言」『月刊言語』第 12 巻第 6 号，pp. 136-137
石倉八十七郎（編）　1888『図画教授術』広済堂
磯村政富（編）　1908『日本登録商標大全 第 2 輯（下巻）』東京書院
磯村政富（編）　1911『日本登録商標大全 第 3 輯（下巻）』東京書院
絵画講習会販売部　1909『洋画材料品日本画用品明細目録』
亀井孝・大藤時彦・山田俊雄（編）　2007『日本語の歴史 6 新しい国語への歩み』平凡社
神門久太郎　1909『実用製図学』建築書院
上村忠昌　2000「「ラーフル」考」『鹿児島工業高等専門学校研究報告』第 35 号，pp. 69-83
柏谷秀一　2021「平瀬作五郎の実像および功績―福井が生んだ、知られざる偉人の顕彰―」『福井県教育総合研究所紀要』第 126 号，pp. 47-58
柏谷秀一・吉田智　2020「平瀬作五郎のイチョウ研究と恩賜賞受賞まで―研究者・教育者としての生涯―」『福井県教育総合研究所紀要』第 125 号，pp. 178-190
片岡啓　2020「旧制中学校の教科「図画」における用器画の指導―『第二類』立体幾何改革のもう一つの背景―」『数学教育学研究』第 26 巻第 2 号，pp. 1-16
片山清吉　1907『機関長受験用機械製図帖』舶用機関学講習会
木元平太郎　1897『画学講義（幾何画法）』大日本中学会
木村源知　2016「戦時期における金属代用品の多様性と変遷―画鋲に着目した事例研究―」『生活学論叢』第 28 号，pp. 1-15
木村源知　2019「戦時期における代用材料としてのレコード盤―画鋲の実物資料を用いた実証的研究―」『道具学論集』第 24 号，pp. 14-26
木村良吉　1903『図画教授法』静岡県師範学校
小林隆　2016「日本語方言の形成過程」井上史雄・木部暢子編『はじめて学ぶ方言学―ことばの多様性をとらえる 28 章―』ミネルヴァ書房，pp. 19-27
ライオン事務器社史編集委員会（編）　1992『おかげさまで 200 年』ライオン事務器
ライオン事務器社史編集委員会（編）　1993『一意誠実 ライオン事務器 200 年史』ライオン事務器
町博光　2015「藤原方言学と民俗学」『安田女子大学紀要』第 44 号，pp. 11-19
松尾哲太郎（纂訳）　1899『機械設計製図学初歩』博文館
松尾哲太郎　1904『新撰中等用器画教科書解説』博文館
松尾鶴太郎（編）　1888『製図学講義録（第一号）』工手学校
明治中学会（編）　1911『言文一致用器画法講義』明治中学会
三越呉服店『みつこしタイムス』1908.11; 1908.12; 1909.1（第 7 巻第 1 号）; 1909.2（第 7 巻第 2 号）; 1909.3（第 7 巻第 3 号）; 1909.4（第 7 巻第 4 号，第 5 号）; 1909.5（第 7 巻第 6 号）; 1909.6（第 7 巻第 7 号）; 1909.7（第 7 巻第 9 号）; 1909.8（第 7 巻第 10 号）; 1909.9（第 7 巻第 11 号）; 1909.10（第 7 巻第 12 号）; 1909.11（第 7 巻第 13 号）; 1910.1（第 8 巻第 1 号）; 1910.2（第 8 巻第 2

号); 1910.9（第 8 巻第 10 号); 1911.1（第 9 巻第 1 号）
三越呉服店『三越』　1911.6（第 1 巻第 4 号）
森井熊太郎（編）　1929『日本文具製造業別名鑑』日本文具新聞社
岡本勝三　1908『簡易機械製図法』工業雑誌社
沖裕子　1992「気づかれにくい方言」『月刊言語』第 21 巻第 11 号，pp. 4–6
小野勇　1983a「平瀬作五郎伝（I）」『生物科学』第 35 巻第 2 号，pp. 105–108; 1983b「（II）」第 35 巻第 3 号，pp. 159–162; 1984a「（III）」第 36 巻第 1 号，pp. 44–48; 1984b「（IV）」第 36 巻第 2 号，pp. 105–112; 1984c「（V）」第 36 巻第 3 号，pp. 159–161; 1984d「（VI）」第 36 巻第 4 号，pp. 212–215; 1985a「（VII）」第 37 巻第 2 号，pp. 107–112; 1985b「（VIII）」第 37 巻第 4 号，pp. 209–213
大庭哲三郎（編）　1934『株式会社内田洋行昭和 9 年版商品綜合型録』内田洋行編輯部
大原鉦一郎　1910「用器画法講義」「図画講義」小学校教員講習会編『小学校教員講習全書（下巻）』大日本普通学講習会，pp. 887–1006
大石聞二　1911『実用機械製図学（上巻）』建築書院
佐分利隆（編）　1897『用器画法（巻之一）』金港堂
坂本胖（編）　1925『全国文具界大観〔大正 13 年版〕』文具界社
坂本胖（編）　1928『全国文具界大観〔昭和 4 年版改訂増補，仕入篇〕』文具界社
佐野正造・宮崎茂三　1910『最新用器画法』良明堂
下中彌三郎（編）　1933『大百科事典（第 22 巻）』平凡社
新村出（編）　1938『言苑』博文館
篠崎晃一　1996「気づかない方言と新しい地域差」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』明治書院，pp. 145–157
篠崎晃一・毎日新聞社　2008『出身地がわかる！ 気づかない方言』毎日新聞社
須永輿平　1909『参考用器画法』修学堂書店
多賀章人　1881『図法一斑（二編）』西宮松之助
高洲幹一　1911『京浜イロハ地理』東京勢至館
竹貫直次（編）　1899『独学実用製図法自在』建築書院
竹下富次郎　1894『中等教育用器画法（上巻）』敬業社
田中不二・内丸最一郎　1906『機械設計及製図（前編）』丸善
田中経人（編）　1937『株式会社福井商店事務用品目録』
東京文具卸商同業組合（編）　1914『東京文具卸商同業組合ニ於テ優良ト認メタル外国製品ニ対抗スベキ東京製文具目録』
鳥居烋夫（編）　1889『図学課程本（第一編）』私立高等普通学校
宇田川勝司　2009『数字が語る現代日本の「ウラ」「オモテ」―地図と統計で見る意外な実態―』学研教育出版
殖田友子　1984「画鋲」下中邦彦編『大百科事典 3』平凡社，p. 543
Ward, J.　2014 “*Adventures in Stationery.*” Profile Books, London
山田敏弘（編）　2008『ぎふ・ことばの研究ノート 第 7 集 岐阜と愛知の方言地図集』
山本金作（編）　1935『ライオン製図器型録第 10 版』
安田吉実・孫洛範・箕輪吉次・李淑子（編）　2006『〔全面改訂版〕韓日辞典』三修社
横山徳次郎　1906『国定準拠補習算術（甲種上巻）』宝文館
湯川巌　1907『独修自在最新製図術』青木嵩山堂